

自分が生きている意味や存在価値をどこに見出すかは、その国、その時代の社会状況から生み出された価値観に左右されがちです。例えば、競争による経済成長や文明発展の流れは、多くの社会貢献をしてきた一方で、いつの間にか、「競争に勝つことで意味のある人生を送れる」とか、「誰かよりも秀でていることが自分の価値を証明してくれる」といった、自分の存在自体に関わる価値基準にまで影響を及ぼしてきたことは否めません。

イエス時代のユダヤ民族が純血性を重んじたのも、自分達の存在価値を必死に求めるが故であったと言えます。しかし、そういった価値基準から漏れ出る人々が必ず出てきます。それが、イエスが伝道の拠点として定めたガリラヤの人々でした。ガリラヤは昔から、多くの外国勢力が支配するところとなり、他民族との混血政策が繰り返されていきました。その結果、人種は混合状態になり、ユダヤ教側からは「異邦人のガリラヤ」(15節)と蔑視されていったのです。イエスは、そんなユダヤ価値社会から遠ざけられた「暗闇と死の陰の地に住む者」(16節)を、「天の国」(17節)と呼ばれる価値世界へと連れ出すために来られたと聖書は伝えています。

本日の箇所ですぐ後、イエスはガリラヤの漁師を弟子にしています。イエスは、伝道の始めから終わり(28:19)まで、弟子を得ること、すなわち、ご自分の言動が「受け継がれる」ことを大切にされていました。その受け継がれ方は壮大です。イエスは「天の国はからし種に似ている」とした上で、「人がこれを取って畑に蒔けば、どんな種よりも小さいのに、成長するとどの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て枝に巣を作るほどの木になる」(13:31)と示されました。種自体は、まさか自分がやがて大木になり、誰かを養う野菜を実らせ、空の鳥が命を育む場所になるとは知る由もありません。

内村鑑三は、『後世への最大遺物』という名著のなかで、「われわれに後世の人にこれぞというて覚えられるべきものはなにもなくとも、アノ人はこの世の中に生きているあいだは真面目なる生涯を送った人であると言われるだけのことを、後世の人に遺したいと思います」と語っています。内村の言う「真面目なる生涯」とは、主イエスの求めたことに向かっていこうとする「態度」のことです。それは、個人の能力差に関係なく、たとえベッドに伏せていても出来ることだとしています。そしてそれは、イエスの言うように、たとえ「からし種」のような小さな愛の態度であっても、世代を超え、時代を超えて、神が造り出さんとする壮大な救いの計画につながっているのです。主イエスは、その価値ある担い手として、弟子として、私達一人ひとりを招いておられます。

(文責：望月達朗牧師)

